

その二 卒業生の思い出

(一) 女専・高校卒業生

第一回生として

大 利 富士江
(旧姓有馬)

終戦後、昭和二十三年四月十五日、当時の高宮中学校の一隅を仮校舎とした「広島県可部女子専門学校」第一回生として、十数名の者は希望に燃えて入学をしました。武田ミキ校長先生の式辞の中に、「今は仮校舎ですが、立派な校舎を建設するからみんながんばってください。」との力強いお言葉が、今も昨日のごとく思い出されます。その翌日から私たち数人は、当時、緑井在住の校長先

生宅から、学校用具に当てられるために、風呂敷包に準備されていた家財道具を運びました。鍋、釜、バケツ、ざる、箸にいたる、あらゆる物でした。緑井駅より慣れない電車に乗る、乗客のげんまなざしを感じ、なんとなく恥ずかしく、電車の隅で乗客に背を向け可部駅に着く、現在ではうそのような話ですが、汽車の線路を歩き、近道をして学校に着きました。笑顔で新尾先生が、「ご苦労さんだったね。」と、優しく声をかけてくださいました。その一言で恥ずかしさも、一ぺんに吹き飛びました。数日で運搬も終わり、学校も日々落ち着き、私たちが学校に慣れてきました。

ある日、いつもお元氣な校長先生のお姿が見えないので、新尾先生にたずねると、「校長先生は、ちょっと身体の具合が悪いので、二、三日休まれます。」とのことでした。病氣は意外に重く、入院・手術される大変な病状になりました。それから数ヵ月が過ぎ、古市町へ移転することになりました。今度校舎になる建物には、建具、畳一枚もなく、雑草で荒れ放題でした。私たちは、付設の倉庫から、畳・建具を選び出し、車力で運んで、だんだんと授業ができる状態になりました。

しかし廊下は下駄履きで、カランコロンの土足でした。障子を開けると畳敷きの教室、私たちは毎日土足で歩いていました。その廊下を磨き始め、いつの間にかピカピカと艶が出てきました。今度は階段磨きを始めました。新尾先生が「貴女たち、今度は階段ね。大変良いことだけど、今から寒くなつて行くのよ。人数が少いのでこの広さでは大変よ。」といわれましたが、私たちは「できるだけやります。」と言葉を返した。みんな寒さにも負けずがんばった。校舎は悪くても廊下の艶は私たちの自

慢の一つになりました。ある朝の事です。その廊下に、物干場から入った、大きな足跡が白くついていました。「大変、大変」と大騒ぎです。大切なマシンが二台も盗まれていたのです。私たちは、早速先生の指示で犯人捜しに横川駅に一日中見張りに行きましたが、犯人らしき人は見あたりませんでした。こんな事件もあったのです。

昭和二十四年三月、第一回の作品展が開かれることになりました。現在のように、豊富な材料もなく、生花は自分で木取りした物や、あり合わせの花器に生けたり、衣料も更生利用した作品が多かったのですが、みんな一生懸命がんばりました。展示した作品は、予想以上に立派に見えました。展示会が終わった時、新尾先生が、「みんな良くやったね。校長先生に見せたいね。」といわれた一言が、今も忘れられません。

それから待ちに待った校長先生の退院です。皆んな大喜びで迎えました。先生のお体は以前と違って、ギブス、コルセットを着用される不自由な体になら

っしやったのです。その姿を見て、私は思わず目がしらが熱くなりました。でも、校長先生の教育熱心さは、以前と少しも変わっていません。ご不自由な体で、それから後も校訓に沿うよう、優しさの中にもすべてにおいて厳しい指導をしていただきました。畳の表替えなども、校長先生の指導で先生と生徒でした。また、ふすまの貼り替えは私の仕事でした。現在のような糸入紙ではなく、糊付けして裏返せば手の所が破れて大変でした。慣れない手つきで一枚二枚と貼るうちに、コツも解り、なんとかでき始めました。仕上がりは良くないが、十数枚貼り終えた時は嬉しさでいっぱいでした。また、校長先生宅のあらゆる物品の提供で、実習を兼ねた学校基金づくりに、先生と生徒が一体となって、衣類の色抜きや染色をしたりして、それぞれデザイン・裁断・仕立てをしました。子供服を始め、婦人物・男物などの数々でした。その品物の販売のお願いに行った事もありました。

このようにいろいろな経験と、真心から教育してくださった数々の尊い教えが、私の人生に、また生活の中に

生かされている事を深く感謝しております。校長先生に習った「嵐吹く、世にも動くな、人心、岩をに根ざす、松の如くに」を、私の座右銘として、これからも生活していきたいと思っています。

(広島県可部女子専門学校昭和二十四年度卒)

外側より内のすばらしさ

枯木 弘子
(旧姓佐々木)

自分が入学したのは、古市でした。今考えてみますと、現在の学校からは想像もつかない程の校舎でした。自分が入学前に考えていた学校より随分の開きがあるのでびっくりした事を思い出します。入学してみても一番先に感じた事は、先輩たちの礼儀作法の立派な事、中学時代には考えてもみなかった事を、次から次と見たり聞いたり毎日でした。

当時、校長先生はお体が悪く、ほとんど寝たきりの状態でした。こんな状態で教育ができるのだろうか、立

派な諸先生方がおられるのに、田舎者の私はそんな生意気な事を考えた事もあります。

古市から可部に移転し、校長先生のお体もだんだんと快方に向うと同時に、学校の方も年々生徒も増して発展にむかいました。しかしあの真夏の太陽に照らされながらの作業のつらかった事。太田川からの土運び。アリの行列みたいにぞろぞろとよく運んだものです。今の学生さんには想像もつかないのではないのでしょうか。自分には、今その時のいろんな状態を思い出して懐かしささえ感じます。

狭い校庭での運動会、文化祭や弁論大会等、一通りの行事はしました。弁論大会で始めて全校生徒の前に立ってしゃべった事、しかしあがってしまつて自分が何をしゃべっているのか……、気が付いてみると、与えられた時間はまだ充分残っているのにもう話す事は終わってしまったという大変はずかしい経験をした事も、今では懐かしく思います。

いずれにしても、二度とこない学生時代、今の学生と

はいろいろな面で比べる事はできないけれど、その時代にあったような学生生活を送られた事は、大変幸福だったと思います。

年に一度の同窓会に出席してみて、時代が変わればこんなにもすべてが変わるものかと何時もびっくりします。現在では他校に勝るとも劣らぬ立派な学校になったという事は、私たち卒業生にとって、言葉ではいい表わす事のできない喜びです。校長先生を始め、諸先生方の人にはいえなご苦労があった事と察します。ひとくちに三十五周年といっても、その間のご苦労を考えますと、どしりとその重みを感じます。

(広島県可部女子専門学校昭和二十九年度卒)

床軸との出会い

中前 昭子
(旧姓沖野)

あれは今から三十年も前のことです。都谷中学の一室で、広島県可部女子専門学校の移動作品展が催されたの

です。和洋服・手芸品等、数少ないけれども立派な作品ばかりでした。なかでも鶴の床軸は、見たことのないすばらしいものでした。私にとってこの床軸こそが、武田学園との出逢いになったのです。

貧しい農村では、クラスの五分の一位の進学率で、私の家も貧しく、母亡き後、病に倒れた父をみるために高校を中退した兄に、進学させてほしいなどとはいえず、家事の手伝いをすることに決めていました。ところがその日本刺繍を見て、どうしても進学させてほしいと頼んだものです。校名も、場所も、教育内容も知らぬまま、食費は現物持参で二年間ならということで、許しが出ました。

入学式の早朝、身のまわりのものと食糧をトラックに積んでもらって、古市の校舎に向いました。まだ見ぬ学校に、不安と希望をいだいて案内された校舎は、どこか工場の寮といった感じの建物で、階下は障子を締め静まりかえっていました。入学式というのに講堂もなく、体育館もなく、教室だって運動場だってないし、と心配でし

た。時間になり二階の会場に案内され入学式ですが、来賓の参列者もなく、内輪だけの入学式でした。しかし、その時ほど緊張し、感激した入学式はありませんでした。校長先生の紋付袴姿、それに教育に対する熱意、校舎の隅々まで良く整理され、床はピカピカに磨きあげられ、礼儀正しく、優しく、親切な先輩の姿が、そこにあったからです。

寮での生活も、その日から始まりました。昼教室に使用した和室は、夜はすべて寮になりました。食事も自分たちで交代してやりました。二十四時間同じ場所で生活をするなど、考えてもみなかったことでした。それでも、部屋の出入口では手をついて、「行って参ります。」「ただ今帰りました。」と挨拶をして、気持ちの切替えをしたものです。すべて変わった環境で、とまどい、驚いたものですが、何よりも驚いたのは、校長先生が病床の身で、昼は校長、夜は舎監と、常に私共を見守り、指導してくださいったことでした。コの字形の校舎の中央にベントを置かれ寝たままなのに、机、椅子のこと、校具の

数、板一枚から、庭に置いてある石のこと、タンスの中のことなど、常に見ていても見のがすようなことまでもすべて記憶され、生徒のどんな小さなことでも聞きのがすことなく、一人一人の指導にあたっておられたのです。入学式一ヵ月後、先輩に仕立てていただいた制服を着て、帰省できたのも感激でした。

学校行事も多く、春の歓迎遠足、体育祭、そして展示会と、一息つく間もなく準備したものです。作品展示会などは、一般にも公開され、高く評価されていました。

日本刺繍は他では見ることでできないものばかりでした。床軸、額、鏡掛、紗など、夏休暇を当てて、夜となく昼となく、細い糸を更に細く、また合わせて太くしたり、金銀糸をあしらったり、それはとても大変な手仕事でした。これもすべてベットの上の校長先生の指導によるものだったのです。お腹の上に大きな刺繍枠をのせて、二〜三十人のものが、それぞれ異なるものを刺すのですから大変なことだったと思います。しかも、この間にも校務を、まさに神わざとしかいようがなく、師とし

て、母として、尊敬し、お慕いするようになったのです。

中学校を卒業して人生の別れ道ともいうべきとき、武田校長先生にめぐり逢えてしあわせでした。学園内での生活は、わずかの日数でしたが、古市から可部へ、そして中島へと、校舎の移転とともに、苦しかったこと、楽しかったこと、この間に学んだ多くは、人間としての生き方を考える尊い体験として、生涯大切にしたいと思えます。

(広島県可部女子専門学校昭和二十八年度卒業生)

なつかしき寄宿舎生活

川本千草
(旧姓花本)

私は、昭和二十八年四月、広島県可部女子専門学校第六期生として入学した。現在の安古市で、可部線電車の古市駅前の土手を、安川に添って四、五百メートルも上がったあたりと思うが、三十年も前のことで、すっかり

様子が変わった。

私の中学校の先輩が、生徒募集のために、自分たちの作品を自動三輪車にいっぱい積んで中学校を訪れ、作品発表をされた、その立派なのに心を引かれ、私は武田学園で学びたいと思った。可部―三段峡線の汽車が、まだ布駅止まりであった頃、通学は無理で、寄宿舎に入るこゝとなつた。柳ごうりに最少限度の生活必需品をつめて、嬉しさ一杯で入学した。

当時の学校の方針は、〃最少限度の学資で最大の学習効果をあげる〃ことであつた。月謝は六百円であつた。校舎はコの字型の木造二階建て、畳に障子の部屋は和裁の教室、床に立式の机の部屋は洋裁教室で、それぞれ五十人は入れた。その校舎は昼は学校、夜は襖で仕切つて寄宿舎になり、フルに使ひ分けられていた。その頃、武田ミキ校長先生は脊髄カリエスを煩つておられ、職員室のベツトに臥せられた状態で、私たちを二十四時間ご指導くださつていた。障子の開けたて、立居ふるまい、言葉使いなど、躰けがとても厳しかった。

寄宿生が当時百人前後はいた。各部屋には天組、地組、仁組、雪、月、花、松、竹、梅組と宝塚の様な名称がついていた。週番の鳴らす起床の鐘でいっせいに飛び起き、身仕度、洗面、掃除、朝礼と一日が始まる。動作は敏捷にしなければならぬ。朝寝坊の私は、頭がくらくらして一番辛かつた。しかし先輩の寮長さんの声を聞くとピリピリした。炊事当番も部屋廻りでやつた。平釜で朝は弁当のご飯を炊き、朝ご飯を炊き、味噌汁を作り、百人分もの弁当を入れて七時には朝食にしなければならぬのだが、十六、七歳の者ばかりでよくやつたものだと思う。さつま芋や卵の花の味噌汁も懐かしい味の一つで、時々思い出しては作ってみる。また平釜でできたおこげに塩をパラパラとふつて食べるのも、当番ならではの味わいだった。明日は試験といえども甘えてはいられない。風呂当番をしながら試験勉強をした覚えもある。日曜日は、食事当番は食器を裏の川へ持って行き、くどの木灰でピッカピカに磨いた。水洗便所等聞いたこともない頃で、安川の水はきれいに澄んで流れていた。同

じ釜のご飯を食べたお姉さん方や友だちの顔が浮かんでくる。

古市の町に映画館があった。当時は、映画館へは家族同伴でないと行つてはならないことになっていた。寄宿生も、時々夜団体で映画鑑賞に連れて行つていただいた。二本立てで三十円也と日記に書いている。

できるだけお金を使わないようにとの校長先生のおはからいで、寄宿生は食糧を現物持参となつていた。その食糧を取りに帰ることを口実に、月一回の帰省が楽しみだった。校長先生に許可をいただき、三つ指ついてご挨拶をし、家に帰った。校長先生の厳格な生活指導のおかげで、少しずつ変わってゆく私を楽しみに待つてくれた祖父母も母も、今はいない。二年生から、学校は可部駅のそばの元中原小学校の校舎へ移った。建物も大きくなり、学園祭も年々盛大に行われるようになった。運動場も広くなって、運動会も盛会だった。中でも仮装行列は人気のある出し物で、見ものであった。

その頃、全校生徒が朝と放課後の時間を利用して、太

田川から砂を風呂敷で一日何杯か運ばなければならなかったが、何をするためであったか思い出せない。しばらくすると、その学校の敷地を、五十四号線が走ることになり、学校はまた中島の現在安佐市民病院ができた敷地へ移ることになった。その頃はまたあの廻りは田や畑や竹藪であつたので、整地をするため、生徒たちは労働力を提供した。というより、校訓に「勤労を愛する人になりましょう」というのがある、身心を鍛える場を与えていただいたといった方が良いかもしれない。あの頃は、バタンコという自動三輪車があるくらいで、ダンブカーやシヨベルカー等見ることもなかった。その土地も何年かして広島市へ譲渡しなくてはならない運命にあつたようだ。

三十五年の長い歲月の中には、母校発展のために先生と生徒が一致協力してやってきた時代があつたことを、後輩の皆さんも知ってほしい。今思えば、あの頃はあの頃でいろいろな想い出がいっぱいある。

(広島県可部女子専門学校昭和二十九年卒業)

二年間が今の力になって

奥田許子
(旧姓出雲)

私が入学したのは、終戦もない昭和二十四年の四月である。当時は、田舎の中学から町の学校へと出る者は、級でわずか五人ぐらいであった。

学長先生は当時、ご病気の体でありながら、コルセツトを体にはめて、私たちの指導にあたってください。寝台に横になられたままの姿勢での日本刺繍の指導、よくがんばって指導してください。私も寄宿舎生は、学長先生と三人の先生方と寝食を共にできた事を、何物にも変えがたい体験であったと思っています。

私が入学した当時の校訓は、現在も私の座右の銘としている。

一、責任感の強い人

一、謙虚

一、優雅

の三校訓である。

当時寄宿生活をしながら、昼の間は教室に変わる宿舎のため、起床時間は六時、炊事当番を決め食事の仕度をしていた。炊事は、コンローで行った。一年過ぎた頃、中庭に炊事場と、風呂場が建てられ、家庭同様、宿舎のそばで風呂に入れるありがたさを味わったものである。

私にとっての二年間は、若い時の唯一の良き時代であり、数々の指導を受け体験した事は、私の心の中に奥深くいつも居座わっている。時々当時を想い出しては、良き反省の材料や「力」となっている。

(広島県可部女子専門学校昭和二十六年度卒)

忘れ得ぬ女専時代

岡本 みどり

女専時代を思い返すとあの日あの時が目に浮かぶ。

「風呂敷を明日持つてくるように、使いかけで良いか

ら。」と受持ちの平田先生(旧姓小田先生)にいわれ、何の事かとよく聞いてみると、砂運び、つまり運動場作りで、全校生が午前中と午後とに別れて、持参した風呂敷に砂を入れ作業するのである。二年生の一学期半ばのように記憶している。ずらっと並んで、次々リレー式で砂を校内まで運ぶ。午前中の作業だと、疲れて午後から眠くて授業中は大変困った。田植え、稲刈りなどもした。隣校の可部高校生からは、ドカチン学校、ボロ学校と陰口をたたかれ、若い身はただはずかしさとしんどさに身を縮めていた。

私は生真面目ときているから、懸命に働いては、家に帰って肩が痛い痛いと、母にさすってもらったり、姉に肩たたきを要求したのを覚えていた。当時、村人は、中学校止まりが多く、進学する人は少なかった。わが家は、二十五年五月北支よりの引揚者で、兄弟七人中、私が高校に入る時期にようやく上の三人が働いていた。しかし無職のような父、母の内職での生活、そんな中での進学であったので、とにかく費用のかからぬ学校を求めて本校を選

んで入学したのだから、洋裁士になろうとか、あるいは和裁仕立てをして働いて行くなどという目的を持たぬ生徒であった。姉妹中で一番無器用な私であったから、一日目より困った。

当時、広島県可部女子専門学校という名だったが、世間には花嫁学校という人もあった。私が入学するまで古市で、それから可部の中原小の跡に通学する事になり、古市は寄宿舎となった。女専は、私共が卒業して後に高校と成り、近所の子や親戚の者も入校した。なにゆえか、高校という名にうらやましさを感じたのも事実である。

文化祭ともなれば、皆大変なでき栄えで、力作ぞろいであった。学校に泊まり込んで縫物をする者、準備をする者、飾りつけをする者、作品を並べる者、それはそれは大変であった。しかし皆一生懸命で、先生方も泊まって一緒にしてくださる、ほんとうに教師と生徒が一体になったの作品発表会でした。

それゆえ、そのための掃除も念入りにされ、終わると校長先生自ら一つ一つ教室を回って、窓の棧、床の磨き

方など点検に来られる。隣室に来られた事がわかると、次は私共の室だと、皆ずらっと並んでおとなしくおしゃべりをやめ息を殺して、何をいわれるだろうと、校長先生の近づいて来られるのを待つ、その時間の長い事。いよいよ教室へ入られると、ゆっくり隅から隅まで見られる。そのお姿を生徒が目で見追う。ひととおり見終わると、もう少ししっかり床を磨きなさいといわれる。やれやれまだ残ってやるのかと溜息しながらやったりした。そして暗い中を電車に乗り遅れまいと級友とさわぎながら乗車。家の者が心配して、駅迄迎えに来てくれたりしていた。当時、日本中が戦後の中を立ち上がりつつある折で、物資もまだ不自由で、運動会にもスポンで競技した頃のことである。

思えば二年間の在校だが、今も交際している人たちは、本校の級友ばかりで、可部女専生活は忘れ得ぬ。当時校長武田ミキ先生は脊髄カリエスを病んでの生活、教員室で畳のベットにカーテンを引かれていた。それが唯一の先生の部屋であり、三六五日、生活の場であった。今日

のご長命を見る時、あのバイタリテイには感服する。

当時は純情で、先生のアダ名さえいわなかった。それでも受持ちの平田先生を「お母ちゃん」、B組の福井先生は「お姉ちゃん先生」でかわいいう呼びかただった。当時、太田川の水は澄んでいて、卒業写真は川べりで取り、最後まであっちへうろうろ、こっちへうろうろ。大方授業が終わりの所へ帰り、先生に大目玉を頂戴したのも昨日の事ようである。苦しい家計の中から修学旅行に参加させてもらい、九州へ行き、阿蘇の雄大さに驚き、高崎山のオサルに奇声をあげ、地獄めぐりは、足をすべらさぬようにと歩いたのを思い出す。楽しいかな学生時代。

卒業アルバムの作製をまかされ、祇園の紀川写真館に日曜日の半日、平田先生とご一緒に打ち合わせに行ったのも昨日の事よう。二年間の学園生活が、今、走馬燈のようにめぐりめぐる。

(広島県可部女子専門学校昭和三十年卒業)

復興は私たちの手で

太田 多美枝
(旧姓福原)

私は学園の教育方針に引かれ、昭和三十一年四月、広島県可部女子専門学校へ入学しました。その時の学校は、可部町下の浜にあり、二階建て北校舎、中校舎、それに寄宿舎の三棟でした。

一年間は平穩無事に過ぎ、やがて二年生への進級直前に高等学校設立の認可が下り、希望者には二年生への編入試験が実施されました。その結果、三十五名の二年生と新一年生三クラスで、翌三十二年四月広島県可部女子高等学校が発足し、両校の校長先生を武田ミキ先生が兼務されました。宮本先生、小田先生もその年にお迎えし、一段と学校内は活気を増しました。一ヵ月過ぎ、新課程にもどうにか慣れて来た矢先の四月三十日午後一時過ぎ、私たちが授業を受けていました北校舎二階の教室

で、火災が発生したのです。

「火事だ」という友の声に、天井を見ますと、もう煙と共に炎が見えておりました。火の廻るのが早く、避難するのがやっとの事でした。この火災で、二階建て北校舎と校長先生のお住いが一瞬のうちに全焼してしまいました。幸いケガ人は出なかったように思いますが、学校の教材や、先生はもちろんのこと私たち生徒の持ち物も全部焼けました。校長先生は、「たとえ青空のもとでも、明日からの授業は続けて行きます。」と行ってくださり、随分力強く感じました。

しかし、一度に六教室も失ったわけですので、それからが大変な毎日の繰り返しになりました。同じ敷地内にあった寄宿舎を教室として使用する事に決まり、昼間は教室に、夜は寄宿舎にと早替りするのです。朝食の遅れた時などは、もう外で通学生が待っている有様でした。幸いな事に、中島に新校舎を建設していただける事が決定していましたので、生徒会でも「復興は私達の手で」という目標を掲げ、一日も早い新校舎の完成を願い、先

生方と生徒が協力していく事に決めました。

そのひとつに、校舎の整地作業がありました。現在の
ように、車や機械の力を借りるのではなく、シャベルや
手箕を持つての手作業です。体育の時間が急にこれに代
わる事もあり、特に私たち寄宿生は、早朝や夕方遅くまで
がんばりました。校長先生も、自ら先頭に立たれ、能率良
く仕事が進むように指揮されたものです。その時の先生
は「為せば成る、為さねばならぬ何事も、成らぬは人の
為さぬなりけり」と、よくいっておられました。全く
そのとおりだと思いました。

そして翌年の一月、遂に待望の新校舎が完成し、真紅
の校旗を先頭に、中島の新校舎へ移転してきました。そ
の時の校旗の重さは格別でしたが、新しい校舎で学べる
喜びに胸は高鳴り、足取りは軽かったように思います。
普通校舎、体育館に続いて特別教室や寄宿舎も次々に完
成し、充実した環境の中で学ぶ事ができました。

このような思い出一杯の校舎が現在存在していない事
は、私たちその頃の卒業生にとりましては一抹の淋しさ

を覚えますが、それにも増して、上原の高台のすばらし
い環境の中に立派な校舎が新築され、大変嬉しく思っ
ております。二十数年前、私たちが中島のあの校舎に移
て来た時の気持ちと、現在の生徒さんの気持ちが同じで
はないでしょうか。

私たちが入学した当時の校長先生は、職員室のベッ
トに臥しておられ、そこですべての指揮を取っておられま
した。やむを得ずベットを離れられる時は、必ずコルセ
ットを着用され、そのお姿を拝見する時、お気の毒でた
まりませんでした。最近はそのコルセットも外されるま
でにすっかり健康になられ、嬉しい限りでございます。

(広島県可部女子高等学校昭和三十三年度卒)

「謙虚で優雅な人になりましたよ」

田 中 喜美江
(旧姓西岡)

私が卒業したのは昭和三十五年でした。当時、初の人
工衛星の打ち上げ、皇太子さまのご成婚と、世の中が徐々

に活気づいてきた時代でした。武田学園の広島県可部女子高等学校家庭科が新設され、今の安佐市民病院の建物のところに、五カ年計画で本館の一部が完成しつつあったのもこの頃です。

一年生の担任は宮本先生で（私たちの入学時に本校に就任され、後に校長先生として活躍されました）、尻の下った優しい先生で、数学を教わりました。余談になると、級友であった俳優の故木村功氏の思い出話をしてくださいました。

さて、入学の喜びに浸っていたある日、学校の一部が火事になりました。当時は家庭科が専門でしたから、上級生が下級生の制服を縫ってくださり、その日は新入生全員の制服ができ、宮本先生とお礼を述べに行く時でした。教室を一步出た時、「火事じゃ」「火事じゃ」と向い側の廊下から武田校長先生が走って来られました。とっさのことで、その後何をしたのか記憶がないのです——。気がついてみると、真っ赤に空を焦がした炎も消え、柱などが無残に散乱していました。目の前のことは

幻のように思えました。それから数日というもの、先生方と生徒で後片付けをしたのですが、ばい煙で息苦しく逃げだしたい気持ちでした。しかし、共に苦勞を味わったことにより心のつながりができ、先生と生徒の絆がより固く深く結ばれたような気がします。

私たちはさておき、その時の校長先生のご心労はいかばかりだったことでしょう。

校長先生は入学してまもない私たちに、「誠に徹しい試練に遭っても負けてはいけません。齒をくいしばって耐える心『忍苦の精神』をもちなさい。」と教えてくださいました。そしてその精神を自らが実践されたお姿に、深い感銘を受けました。卒業後もこの教訓を忘れないで、私の座右の銘として実行するよう心がけています。

それから「謙虚で優雅な人になりましょう」という校訓が好きで（自分に一番欠けているからでしょうか）、ここだけは毎朝大きな声を出して朗読したものです。

さて、学校や生徒会の行事では、NHKの臼井正明氏にご指導をお願いし、趣向を凝らした学園祭。初めて坐禪を体験し、もうこりこりですと本音を吐いてしまった仏通寺。大きなお尻をもてあまし、はるか後をくっついて走った体育祭。校庭整備のため、よく砂運びもしました。張りきりすぎて手に力が入り、目的地についた時には半分にもたりずがっかりしたこともありました。

次に教科では国語が好きで、升味先生の「メダカ」のような優しい目と、本読みの独得のアクセントは忘れられません。古典の時間に「恋」「恋」と連発されるので、今日が最高かしらと思いつながら「正」の字をとってみた横山邦治先生。和裁がどうしてもできなくてペソをかき、平田先生を嘆き悲しませてしまったこと。「もう一服いかがですか。」「結構でございます。」「付け焼き刃とでもいうのでしょうか、おしとやかに装ってみたいお作法の時間……、森本先生はきっとお気付きだったでしょうね。

二年生になると生徒会長という役に携わりました。一

生懸命になればなるほど、規律や風紀の面で、先生と生徒の間にはさまれて悩むことが多くなりました。そんな時、担任の石田先生に「この経験が役にたつ時がくるのだからがんばりなさい。」とよく励ましてもらったものです。副担任の小田先生は大学を出られたばかりで、級友の瞳れの的だったようです。先生は男らしく、大らかに見守ってくださいました。

恩師の温かい思いやりのなかで、塾の存在すら知らず、すべてのエネルギーを発揮できた三年間の在学中は、私にとって青春そのものだったような気がします。

(広島県可部女子高等学校昭和三十四年度卒)

学園の空青く高く

石川和子
(旧姓若杉)

太田の清き川水に影を映して……

私が学んだ当時の武田学園は、商業科二八三人、普通科二〇七人、家政科四七〇人、別科四九人の大家族でし

た。在校期間は昭和三十八年から四十年で、卒業して十七年も過ぎてしまいました。

その後、文化祭などの折、何回か学園を訪ねましたが、そのたびに様子が変わっておりました。私は商業科でしたから、その学舎の灯が消えた時は寂寞の念にかられ、友と語ったものです。昨年夏、島本先生をはじめ、中前先生、秋岡先生、堂面先生の商業科の諸先生方にご臨席をいただき、商業科全体のクラス会を開きました。その時、様子を見に立ち寄りしましたが、学園のあった地には、安佐市民病院が建ち、昔の面影は全くありませんでした。かわりに、川向うの山手の頂には、大きく変貌した母校が大学と共にそびえておりました。名称も可部女子短期大学附属高等学校から、広島文教女子大学附属高等学校と変わっておりました。当時をわずかに偲ばせる土手の上に立ち、「あそこが校舎で、すぐそこが寮で、ちょうどあのあたりが校庭で、朝礼台があったはず……」と思いを馳せ、熱いものがこみあげて参りました。しかし、清らかな川の流れと山の緑と高い青空が彼

の地にある限り、武田学園は心の中にすっかり刻まれております。

場所や学舎が変わっても母校にかわりはありません。なにより学園そのものがさらに大きく発展しているわけですから喜ばしい限りです。

母校は外面的に大きな変化を遂げましたが、今の学生さんたちの様子はどのなのでしょう。当時をふり返ってみますと、私たちの頃は、学生気質のようなものがあった、実におおらかで、素朴で、物事に対して白か黒かハッキリしたものがあったような気がします。個々においての存在感があったのでしょうか。それぞれが情熱を注ぎ込む機会もありましたし、場所もありました。

部活動も盛んで、ことにバレー部、バスケット部は対外的にも強く、全国大会に出場し、長崎まで遠征したこともあります。体育部は寮生活をして、早朝から夕暮れまで練習です。裏の川の土手がマラソンコースでした。部員も島出身であったり、山間部出身であったり、実に

野生的な人間が揃っていました。文化系の部活動も地味ですが、脈々としたものがありました。家政科系サークル、演劇部、放送部、いずれも文化祭には大活躍です。

私の所属の生徒会も、島本正則先生を指南役とし、よくあばれたものです。何かというと、商業科、普通科、家政科と、対抗意識を燃やしていた当時、その年はなぜか生徒会役員メンバーを商業科で押えてしまったから大変です。活動的な人間が集まったといえれば聞こえはよろしいのですが、いってみれば、向う見ずで亥生まれそのままの人間が集まってしまったということです。ですから、やることは大胆で、物おじせず、型にはまらず事をやったという気がします。

学校諸行事の影の立役者はもちろんのこと、歳末助け合い運動の街頭募金、似島学園の慰問、災害地への援助、風紀面での改革等々。歳末の募金で忘れられないのは、副会長がガラスで顔に怪我をしてしまい、皆で胸を痛めたことです。似島学園慰問にしても、いかほどの助けになったかは疑問ですが、自分たちのできる範囲で

何かをしなくてはという気持ちの結果なのです。小さな船に小さな真心積んで……。瀬戸の海の青さと子供たちの心の色が同じだったことに感動しました。

今思うと、理に合わない主張もやってのけました。皮靴の形がスマートではないから形を改めよと要求し、ねばり勝ち、弁論大会では即弁論部員になり、文化祭では演劇部の役者に早がわりし、自分の趣味・嗜好が入り混って動き回ったものです。あの時の生徒会が異色なグループだとすると、長たる者も異色だったということですから。通常ならば、生徒会長は秀才というきまりなのですが、全くそうでなかったというところに、おかしくもおらかさがあったのです。しかし、思いつくと同時に皆でワッと動くあの行動力は、どのサークルより勝っていたと自負しております。

私にとっての学園は、多感な年頃のエネルギーを燃やした青春、そのものでした。又青春の一頁には武田ミキ校長先生のお言葉も刻まれております。「女性は優しく強く」とよくおっしゃっていらっしゃいました。ごくあた

り前のことですが、しかし奥深い教えであったと思いません。ずっと後になってそれがよくわかるのです。

現在私は、三児の母親で家事、育児、仕事に追われている毎日ですが、忙しい生活をしていればいる程、より女らしく、より優しく、より強くあらねばなりません。家庭と仕事との柵しがらみの中で、真の優しさ強さを問いながら、教えを繙ひもといています。

学園は心のふるさとであり、心の拠たよりであり、人生の壁にぶつかった時、立ち戻る原点でもあるのです。

滔滔と流れる太田川水清く、学園の空、どこまでも青く高く……。

(可部女子短期大学付属高等学校昭和四十年卒業)